

# The Reminiscence of Exellia NG+1

## 最後の旅路

### 作成レギュレーション

#### 基本概要（新規／継続）

- ・ 経験点：133500／145000 点
- ・ 資金：237000／261000G
- ・ 名誉点：1500／1800 点
- ・ 成長回数：243 回
- ・ レベル制限：13
- ・ アイテムレベル制限：武器ランク S 以上
- ・ ステータスリミット：各項目ボーナス 13 まで

#### 制限事項

- ・ ヴァグランツ、蛮族 PC 禁止
- ・ SW2.0／2.5 標準流派入門・使用禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限
- ・ シナリオの成長回数が 10 以上のとき、60%以上の偏重割り振りの禁止

### 動画用メモ

#### “火防女”ルーソフィア・シャルロッテ・クレア・フォイアヴェヒター・アウェア

読み上げ：未定

エクセリアの実の姉。あまりにも惨い量の『人間性』を抱えて生まれたため、火防女として推挙される。当時は名前らしい名前を得ることがなく、ただ単純に「火防女」と呼ばれていた。

古代世界の黎明期に、妹であるエクセリアから「ルーソフィア」の名を得る。また、役職を加味して「フォイアヴェヒター（独：Feuerwächter、意味は『火を護る者』）」と呼ばれることになる。

### その他メモ

#### 光の加護の封（宙準星の楔）

- ・ 雷属性：対象の「逆境に立ち向かう意志」によって解ける。（Lap2-25）
- ・ 水属性：対象の「哀しみを分かち合う意志」によって解ける。（Lap2-27）

- ・風属性：対象の「理由なき絶望に対する激昂」によって解ける。（蒼天編）
- ・土属性：対象の「弱きを虐げる者に対する憤怒」によって解ける。（蒼天編）
- ・氷属性：対象の「対話によって路を拓こうとする態度」によって解ける。（蒼天編）
- ・炎属性：対象の「歪んだ現実を打ち破る意志」によって解ける。（蒼天編）

## 苦痛の記憶達

### 冬の記憶

彼女が生まれたときから、修練中までの話だ

彼女がその身に宿していたのは、基本的に救世の力だった。

神の律、終わる事なき火の時代を再誕させることができる力…。

人々は彼女の誕生を、心からは祝わなかった。表面上は祝っても、彼女に対して「ただ世界の糧となること」を願っていた。

幼き頃から、その『資質』はあったのか、彼女は無意識のうちに彼らの『定義』を見抜いていた。そして嫌悪していた。

なぜ、彼らに力を貸さねばならないのか。いやなぜ、彼らのために己の命を世界に捧げねばならぬのか。彼女は無意識のうちに、その世界に巣食うすべてに憎悪していた。

そして彼女が武器を手にしたとき、彼女は世界への逆襲を誓った。

### 秋の記憶

ある程度成長した、とある時の話だ。

彼女は親の指示で、近くの森に入って木を切っていた。簡単に木を切り倒し、軽く製材して、家のそばの資材置場に運び込む…。至って普通な生活をしていたが、姉がこう言ったという。

「火の力が弱りつつある。世界は英雄を求めている」、と。

虹彩の変化もあり、彼女が不死なのは確定的だった。そして、彼女の姉は、修練によって鍛え上がった彼女を、英雄として推挙することに決めた。弱冠、15歳のことだった。

彼女は灰の英雄、火のなき灰としてその力を現し、やがて王となる路を約束された。

### 夏の記憶

歩き続けた果ての話だ。

薪の王の首をすべて回収し、残るは『ロードランの古き神たち』を倒し、その火で世界を救うだけだった。

ロンドールの民草は、その火を篡奪して世界を救えといていたが、彼女の中の結論はそれとはまた別の路だった。

その数日前、彼女は姉に『瞳』を与えた。火防女たちが亡くした瞳。  
それを火防女に返し、禁忌と知って尚、彼女は姉を殺すことはしなかった。  
微かな光も、恐ろしき裏切りも…彼女は、どちらも人の道であると断じた。  
そして…、幾度の死を経て、火を継いだものたちの集合体を殺した。火防女が…否、彼女の姉がいう、「永遠に続く暗闇」…。その中に灯る、小さな火を信じた。  
…その先で裏切りを受けるのは、簡単な話だった。

## 導入

### セリーヌの容態

…セリーヌが暴走してから、1 週間。  
セリーヌは、ジョセフによる診察を受けていた。

### ジョセフ

「石化が進行しておる。次は、無闇に顕現するんじゃないぞ？」

### セリーヌ

「ご、ごめんなさい…」

### エクセリア

「ジョセフ。言い方がマズい。彼女は自らの意志で顕現したわけじゃない…、状況がマズかっただけなんだ」

そう言って、エクセリアはセリーヌに処方された薬を持ちつつ医務室から出る。

## 宙準星の楔

セリーヌを部屋まで送った後、君達の元に来るだろう。

(※GMメモ：RP待機)

### エクセリア

「すまなかったね。それでも、彼女を慮ったほうなんだが。

だけど…君達は私を頼りすぎている…。その力の真髄を理解していないんだ。よって、そのありがたみを理解してもらうためにも、君達の身に宿るものに封をさせてもらう」

**精神抵抗力判定 目標値：2080 超**

この精神抵抗力判定は成功しても意味はない。

君達の全身から、光の力が失われるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「何をした、って？そんなもの決まっている…。

君達に宿っている『光の加護』を封じただけだ。君達が特定の条件で、特定の意志を示すことができた場合…、その封が解ける。君達は最強でも万能でもない…ただの、一介の冒険者であることを、思い出してもらうよ」

そう言って、エクセリアはどこかへ行こうとする。

エクセリア

「私は私の目的を果たしに行く。

気になるなら、追うなりここで殴るなり、好きにするといい」

ご丁寧にも、彼女はウィル・オ・ウィクスを使っていたために、君達は殴ることができなかった。

(※GMメモ：RP待機)

大人しく、己を鍛え上げる方が吉だろう。

### 《宙準星の楔》発動

宙準星の楔により、光の加護が封じられました。以後暫くの間、PCは蛮神や召喚獣との戦闘に多大なペナルティを受けます。

対蛮神戦：精神抵抗力判定に-4のペナルティ修正。精神抵抗力判定に失敗した場合、10秒（1ラウンド）の間行動不能になる。

体召喚獣戦：生命抵抗力、精神抵抗力、回避力判定の各判定に-2のペナルティ修正。

それぞれの判定に失敗した場合、及びすべての判定で1ゾロ（自動失敗）を出した場合において、対象は10秒（1ラウンド）の間行動不能になる。

## 聖王の目的

目的について伏せたまま、エクセリアは隠れ家から出て行った。  
君達は、鍛錬ついでに彼女の目的を探す必要があるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

聞き込み判定 目標値：21 / 23 / 27

成功時、それぞれ「冬の記憶」「秋の記憶」「夏の記憶」が解放される。

(※GMメモ：「冬の記憶」解放時、続けて戦闘 1。

「秋の記憶」解放時、続けて戦闘 2。

「夏の記憶」解放時、続けて戦闘 3)

### 『戦闘 1』

敵：失笑の影×8

### 『戦闘 2』

敵：戦乱の塔×4、失笑の影×4

### 『戦闘 3』

敵：憎悪の根源×1、戦乱の塔×4

(※GMメモ：冬、秋、夏の記憶がすべて解放されたときの会話 ここから)

聞き込んだ先のひとり、アンドレイが口を開く。

アンドレイ

「冬、秋、夏…と来たからには、春がある…。お前達は、そう思うだろうが…、彼女にと  
っての『春の記憶』は…」

(※GMメモ：RP待機)

君達に問い詰められると、アンドレイは渋々口にする。

アンドレイ

「ねえんだよ、あいつの『春の記憶』は…。

当時の人間は皆揃って、あいつのことを無謀だ無駄だと言って、『世界の贄』になることを切望した。あいつはそれを嫌がった。だからこそ、あいつには春の記憶はない」

(※GMメモ：冬、秋、夏の記憶がすべて解放されたときの会話 ここまで)

君達は、聞き込んだ内容を加味して、その言葉に嫌気が差すだろう。

失笑、憎悪、侮辱、嘲笑…。上げだしたらきりがない。

彼女の心を示す要素は、あまりにも黒かった。

そんなときに。

エメリーヌ

「君達に…ああ、その…厄介な客がね…」

(※GMメモ：RP待機)

??????

「世話になりましたね」

船頭のデヴィッド

「おたくなら、いつでもどうぞ」

??????

「フフッ…」

どことなく、エクセリアをもうちょい成長させたような、仮面をつけた女性がそこにいた。

(※GMメモ：RP待機)

??????

「おお、彼らが例の冒険者ですね？」

船頭のデヴィッド

「行ってやれ。そのほうが、話も簡単にできるだろう」

(※GMメモ：RP待機)

なんのアポもねえ来訪に困惑しながらも、君達はその女性を出迎えることになる。

### 火を護る者

君達は、その女性と対面するだろう。

ルーソフィア

「お初にお目にかかります、エクセリアの姉の、ルーソフィアです」

(※GMメモ：RP待機)

その礼儀正しさは、あまりにも古風だった。作法といい、その言葉遣いといい…、大凡現代で見聞きするようなものではなかった。

では、彼女も『火の時代を生きた者』なのだろうか？

(※GMメモ：RP待機)

ルーソフィア

「ええ。私はかつての時代を生きた者です。そして、強すぎる魂であったが為に、分かつことのできなかった者の一人でもある…。

あなた方の光の加護が止まったと、妹から聞いたもので。何事かと思ひまして…」

そう言って、ルーソフィアは君達を見る。

その赤い双眸は、やはりというか、妹のエクセリアに似たものがあつた。ただなぜだろうか、その目の色を信用することができなかった。

(※GMメモ：RP待機)

ルーソフィア

「え、ええ…、確かに、私は火防女で、この瞳は妹から渡されたものですが…」

(※GMメモ：エクセリアの視力に関する RP)

ルーソフィア

「…そうですか。妹も、本来の視力を…」

ルーソフィアはそう言って、エクセリアの、失われた視力を慮る。しかし、なぜ姉が来たのに妹がいないのか…ルーソフィアは解せないような表情をしていた。

そんなとき、エメリーヌが君達の元に来る。

エメリーヌ

「エクセリアが向かった先について、大まかに見当ついたわよ…って、あら。珍しいですね、アウェア卿。《隠れ家》に来るなんて」

ルーソフィア

「エクセリア…彼女は、最近無茶をしていませんか？」

(※GMメモ：RP待機)

エメリーヌ

「ええ、彼女はいつものように無茶をしていますよ。この前なんて、暴走した召喚獣を止めるために顕現しましたし」

その言葉を聞いていたルーソフィアは、少しキレそうになっていた。

ルーソフィア

「あの子ってば、いつもそうね…」

エメリーヌ

「彼女はそのつもりはないでしょうけどね。ただ彼女は、大量に何かを背負い込んでいるみたいよ」

(※GMメモ：RP待機)

PC への選択肢

- ・ 背負い込んでいる？
- ・ エクセリアさんはいつもそうだからなあ…

(※GMメモ：RP待機)



ルーソフィア

「い…いつも…ですって…！？」

(※GMメモ：RP待機)

困惑して…君達に、彼女を追うようにせがむルーソフィアを見て、エメリーヌは決定的な言葉を口にする。

エメリーヌ

「彼女…、アヴァルフ妖精諸王国連邦に向かったわ。外交目的だから、私達ができることはないと思って」

(※GMメモ：RP待機)

会議は進む

一方、妖精卿アヴァルフ――

(※GMメモ：BGM「From the Shadows (FF16)」)

エクセリアは、妖精卿アヴァルフの女王の宮殿にて、ある人物と話していた。

話している相手の名は、ナディーヌジェーム。「エルフの7氏族」のうち、光を象徴とするギヌメール氏族を代表する者。

ナディーヌジェーム

「抱持ちの魔動天使までもを連れてきて、何事かと思ったら…、なるほど、前々から聞いていた“霊極の蛮神”の盟約に従ったという訳か。

して、コズミック・キューサー。お前の言う、“破滅の律”を払い除けることができていると聞くと、その“破滅の律”とは一体何なのだ？」

エクセリアは己の内から言葉をひねり出すように考える。

エクセリア

「破滅の律…。それは、このラクシアすべてを無へと還す存在だ。無論、それを放置しておけば、すなわち死を意味する。あなたが護る、“妖精の女王”も死に絶えるぞ」

ナディーヌジェームは、その言葉を吟味する。

はて、ラクシアすべてを無に還すほどの存在が、一体全体どのように存在できているのだろうか、と。ラクシアに住まう者は、基本的にラクシアの外には生命らしいものは存在し得ないと考えている。だからこそ、護る範囲を狭めることができるのだと。

では、今日の前で、召喚獣コズミック・クエーサーのドミナントが言った言葉が嘘になるのだろうか？いや、それは否だろう。彼女の言は、そもそも“ラクシアの理や律の外側にある存在”と邂逅していないと生まれない覇気が生まれていた。

ならば、先ほどの仮定に疑問が生じる。

ナディーヌジェーム

「…まさかとは思うが、破滅の律とは、つまり…このラクシアという星の外に在る存在なのか？」

エクセリア

「…確証はないが、恐らく。奴の前では、世界が持つ修正力はすべて灰燼となる。彼の思うがままに、あらゆる常識が歪み、そして破滅という結末にすべてが誘われる」

信じられないような表情で、ナディーヌジェームはエクセリアを見る。

お構いなしに、エクセリアは言葉を続ける。

エクセリア

「アレの最終目的は、至極単純だ。破滅の繰り返し…すなわち、人が滅んでいく様を眺めて嗤っていたいという、悪趣味極まる話だ」

ナディーヌジェーム

「待ってくれ。だとすれば貴公は…、この世のどこかに、それを成す端末がいるということなのか…？」

エクセリア

「…確実には言えない」

エクセリアの言葉を呑みつつ、ナディーヌジェームは思案する。

ナディーヌジェーム

「そも律たる存在が、私達を滅ぼそうなどと考えること自体がおかしいではないか。

貴公の言葉は信じるとしても、それを多くの民に言うのは不可能だ。それとなく避難準備をさせることは可能だが、果たして、どれほどの民がそれに従うか…。その上、今は明確に、チェナッカに代わる妖精の語り部がいるからいいものの…、その妖精の女王が、律に操られる危険性すらあるのだろう？だとすれば、こちらは用心することはできても、それ以上のことはできないな」

エクセリア

「…備えあれば憂いなし。律がいつ、あなた方に手を出すかも分からない…。備えを続けてくれないか？」

軽く首肯し、ナディーヌジェームは呼び鈴を鳴らす。

エクセリア

「感謝するよ、ギヌメール卿」

ナディーヌジェーム

「うむ」

彼女らは互いに悪手をし、エクセリアはその一室を出た。

国外の上空、ブルーフェザー・リンクスの背の上で、リリアーナはエクセリアに訊く。

リリアーナ

「我が主君。明確な答えは得られたのですか？」

エクセリア

「…アルフレイム大陸の人族領を、もう少し旅するべきなんだろうが…」

そんなときに、虚空からネクロフォビアが現れる。

ネクロフォビア

「……………」

エクセリア

「…なに、冒険者が…？」

困惑しつつも、エクセリアは隠れ家まで飛び続けた。

何が起きている。エクセリアは、心の中で毒づいた。

## 報酬

### 経験点

このシナリオに経験点報酬はありません。

### 資金

・ 基本：6000G

### 名誉点

・ 基本：100 点

### 成長回数

・ 基本：7 回